【第四三回大会公開講演】

「南島説話大成」の可能性 ―四十五年のフィールド調査のなかで―

福田　晃

はじめに ―戦後の神歌研究―

柳田国男・折口信夫、そして伊波普猷などによって拓かれた南島（奄美・沖縄）研究[1]は、苛烈な沖縄戦を経て、昭和三十年代に及び、新しい段階に入ったと言える。特に民間の口承文芸研究においては、外間守善氏を中心とする神女（ノロ・ツカサ・神人）の唱誦する神歌の収集活動、および山下欣一氏を中心とする民間巫女（ユタ・カンカカリヤー）の唱誦する呪歌の収集・研究活動は、括目すべきものがあると言える。

(一) 外間守善氏の民間祭儀における神歌収集

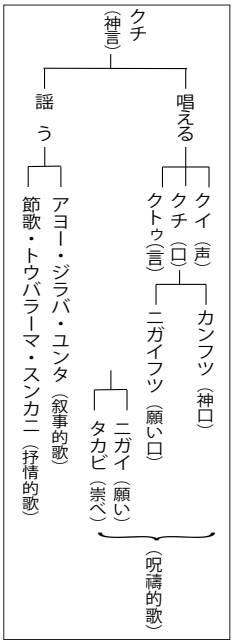
外間守善氏は、昭和二十年の沖縄戦に生き残り、昭和二十一年に上京し、国学院大学に進学、同大学を卒業後、金田一京助教授の勧めで、東京大学言語学科の研究生として言語学を専攻される。しかして昭和二十九年には、沖縄文化協会の『おもろさうし』の研究会に入り、その研究を深められてゆく。[2]（その研究成果は、後に仲原善仲氏との共編『校本おもろさうし』（昭和四十年）[3]、『おもろさうし辞典総索引』（昭和四十二年）[4]、また岩波・日本思想大系の『おもろさうし』（昭和四十七年）[5]として公刊される。）

およそ『おもろさうし』は、琉球国府に属する国家的レベルの神歌と言える。これに対して、南島には、村落レベルの祭儀において唱誦される神歌群がある。外間守善氏は、昭和三十八年、この民間祭祀のなかで唱誦される神歌の収集を志され、まず宮古島北部の狩俣集落に入り、その祭儀における神女（ツカサ）・神人（カミンチュウ）の唱誦する神歌「ニーリ」「タービ」「ピヤーシ」「フサ」などを収集される。（それは昭和四十七年に、新里幸昭氏と共著で、『宮古島の神歌』[6]として公刊される。言語表記・片仮名表記・和文表記を対照した、みごとな報告書であった。）

さて、外間守善氏は、右の宮古の神歌収集以後、十余年にわたって、南島各地の神歌を含む伝承歌謡の臨地調査、および南島歌謡に関する文献資料のすべてによって、昭和四十六年に『南

島古謡』（日本庶民生活史料集成・第十九巻）[7]を公刊される。それには奄美諸島・沖縄諸島・宮古諸島・八重山諸島の伝承古謡が収載されている。さらに外間氏は、右の古謡集成を一歩進めて、昭和五十三年～昭和五十五年に、『南島歌謡大成』全五巻[8]を公刊される。それは各巻の地域ごとの研究者との共著とされる。壮大な収集活動であり、壮絶な報告書作成と言える。その全貌は、『大成』各巻のそれぞれによってみていただくとして、外間氏は宮古編・八重山編・沖縄本島編（上下・二巻）・奄美編のそれぞれごとに、その地域における伝承歌謡の大系化を試みられている。すなわちそれは、A・呪祷的歌謡、B・叙事的歌謡、C・抒情的歌謡に分類される。その呪祷的歌謡が民間祭祀において唱誦される神歌に属するものである。

しかして外間守善氏は、その歌謡の推移をA・呪祷的歌謡（神歌）からB・叙事的歌謡に及び、さらにC・抒情的歌謡へと推移したと説かれる。およそ納得できる解説である。しかも外間氏は、昭和五十九年六月の『文学』特集「沖縄の文学・芸能」[9]において、右の南島歌謡分類案を簡潔に示しておられる。



しかして外間守善氏は、この「クチ」（神言）に属する呪祷的歌謡のなかに、かつて折口信夫氏が「国文学の発生」[10]で説かれた呪言・呪詞の姿をみてとって、それを論じられるに至る（『南島文学論』参照）[11]。それによれば、短詩型の神言から展開する呪祷的歌謡のなかに、「神語（かんがたり）」がみえてくることになる。それは、民間伝承における神話の韻文伝承にほかならないのである。

(二) 山下欣一氏の民間巫儀における神歌収集

およそ山下欣一氏は、昭和三十年代の中頃から、奄美における民間巫女（ユタ）の生態調査に入り、その巫儀において巫女（ユタ）が唱誦するオタカベ（呪詞）の収集を始められる。その最初は、自らの出自なる巫女（ユタ）筋の伝承調査であった。その山下氏の調査報告をわたくしが手にしたのは、昭和三十九年、鹿児島民俗学会発行の『民俗研究』第一号収載の「奄美におけるユタについて―その予備的考察―」であった。そこには、奄美における民間信仰の担い手であるユタの生態が明らかにされている。それはまず南島におけるノロ・トキ・ユタの職能的分化をあげ、ユタに関する先行の文献資料を検討される。次いで自らの奄美大島において出会った多くのユタの成巫過程の実態を報告され、そのなかでユタ自らが唱誦するオタカベ（呪詞）の数々を紹介される。さらにそれは、成巫したユタそれぞれの祈祷活動を詳しくあげておられる。

この報告の後、山下氏のユタに関する調査は、奄美大島から

喜界島、徳之島、そして沖永良部島に及んでいる。昭和五十二年、そのユタに関する生態調査は、『奄美のシャーマニズム』[12]として公刊される。またそのユタの巫儀におけるオタカベ（呪詞）の研究は、昭和五十四年に『奄美説話の研究』[13]として上梓されている。しかも本書でとりあげられているユタの唱誦するオタカベの数々は、先にあげた折口信夫氏の「国文学の発生」で説かれた「一人称式に発想される叙事詩（呪詞）」に通じるものであった。つまりそれは、神話の韻文伝承なる「神語」に属するものと言えるものであった。

一　南島説話のフィールド調査―昭和四十六年以降―

(一)　わたくしどものフィールド調査と報告書

奄美地方における合同調査

わたくしは、昭和四十六年（一九七一）、立命館大学に転任した年、京都女子大学の稲田浩二氏、大谷女子大学（小生の前任校）の岩瀬博氏とはかって、南島における昔話を中心とする口承説話の採訪を志す。先達は、当時、鹿児島県教育委員会におられた山下欣一氏で、その勧めで、最初の採訪地を奄美・徳之島と決し、同年七月十九日に出立する。大阪から鹿児島まで夜汽車で十三時間、鹿児島港から千三百トンの照国丸に乗り込むと、そこは台風の荒海であった。最初の上陸地は沖永良部島の予定であったが、往路では暴風雨でそれがかなわず、与論島をめぐった後に、再び沖永良部島に向かい、ハシケによる命がけの降船となった。同行の参加者は、山下・稲田・岩瀬三氏のほか、京都女子大学の学生三名、大谷女子大学の卒業生の七名で、総勢十三名であった。

翌二十一日、とりあえず学生たちを沖永良部島見学に送り出し、わたくしどもは山下氏の案内で、幾人かの島の語り手を訪ねる。そのなかで印象に残った語り手は、上平川の山田島秀翁（当時七十八歳）であった。普段は老人ホームに入っておられるが、その日はたまたま在宅で、快くわたくしどもを迎えてくださる。それはなかなかの元気者で、シマクチ（方言）で、次々と昔話を語ってくださる。山下欣一氏の通訳によると、「運玉奴と油食い小僧」「アラバシャギンの絵姿女房」など、十余話に及ぶ。聞くと今でもよく語っているとのことで、先立っても老人ホームで亡くなった友人の夜トギに、話好きの婆さんを相手に夜の九時から朝の四時まで語ったという。その聞き手の婆さんが、「もういい」と言ったのでやめたが、およそ三十七話を語ったと言われる。この地方では、夜トギに昔話を語るのが常で、病気見舞いも夜明けまで昔話を語るものの由、驚きであった。

翌二十二日、ようやく北上する船をつかまえて目的の徳之島に着く。迎えてくださったのは、元徳之島町教育委員会におられた松山光秀氏を中心とする徳之島郷土研究会の方々であった。まず本土からのわたくしどもが困ったことは、ご当地の日常的な会話なるシマクチが理解できないことであった。その昔話の

採訪調査にあたっては、郷土研究会のほか、各教育委員会の職員に付いていてくださっているので、語り手との面談は一応かなうのであるが、そのシマクチの昔話（ムンガタリ）は、わたくしどもには、ほとんど理解が及ばぬことであった。一話ごとに案内役の郷土研究会の方、または教育委員会の職員に通訳をしていただく。たまたま七十歳前後で、ヤマトグチ（共通語）に通じる語り手であれば、シマクチとヤマトグチと二度語ってもらう。しかしそのシマクチの語りは饒舌であるが、ヤマトグチのそれは、たどたどしい。わたくしどもは、島のことばのシマクチの語りにこそ伝承の心意（真意）が伝承されることを思い知ったのである。徳之島町・天城町・伊仙町の三町におけるフィールド調査は、およそ十日間、いささか不本意な昔話の採訪とはなったのである。

翌年の八月中旬、わたくしと岩瀬博氏は、大谷女子大学の卒業生・学生、立命館大学の学生たちを同行して、徳之島全域の昔話の補足調査を進める。今度は前回の経験から、ヤマトグチが語れる方には、二度、繰り返し語っていただく。一度目はシマクチ、二度目はそれをヤマトグチで語っていただく。シマクチのみの語り手の場合は、そのシマクチの語りに続けて、ヤマトグチの語られるやや若い老人に、それを通訳ふうに語っていただく。それをそれぞれに、テープ・レコーダーに収録するという方法によったのである。

わたくしと岩瀬氏は、以後、沖縄の採訪調査とかさねて、徳之島の補足調査を続けた。そしてそのシマクチの語りを中心とする報告書作成を試みる。その語りの翻字と対訳は、徳之島郷土研究会の方々が引き受けてくださったが、その中心は松山光秀・徳富重成の両氏であった。およそ七年の歳月を経て、シマクチによる『奄美諸島　徳之島の昔話』[14]は、上梓することができたのである。

なお奄美地方における昔話フィールド調査は後にあげるごとく、昭和五十五年の奄美・沖縄民間文芸研究会の合同によって、奄美大島龍郷町において実施している。これは、山下欣一氏の指導される奄美民俗談話会といっしょに進めている。また昭和五十六年・五十七年には、わたくしが指導する立命館大学説話文学研究会が、同じく奄美大島笠利町において昔話フィールド調査を実施している。これも奄美民俗談話会と合同によるもので、その報告書『奄美・笠利町昔話集』〈笠利町文化財報告・第九号〉[15]を公刊したのである。

沖縄地方における合同調査

さてわたくしどもは、沖縄の本土復帰の二年目、つまり昭和四十八年（一九七三）、沖縄国際大学に在任されていた遠藤庄治氏より、沖縄における口承説話の収集調査について、指導・助言をせよとの依頼を受ける。その申し出は渡りに舟であった。同年八月一日より一週間、第一回の三大学（沖縄国際大学・大谷女子大学・立命館大学）合同のフィールド調査に入った。それは、先輩に当る琉大の湧上元雄教授の推挙によって、沖縄本

島の東上にある与勝諸島における昔話のフィールド調査となった。わたくしと岩瀬博氏とは、大谷女子大学（卒業生・学生）八人、立命館大学（院生）二人を同行して参加、遠藤氏は沖縄国際大学（卒業生・学生）十余名を同行する。班を五つに分ち、津堅島・浜比嘉・伊計島・宮城島・平安座島の五島を採訪する。しかしこの合同調査は、大変なこととなった。なにしろ現地の語り手たちは、ほとんど共通語を理解されない。本土班は、調査の経験者とて、その指導的立場で、初心者の沖縄班と混合のチームを組む。しかし沖縄班はシマクチに通じるとは言え、沖縄各地からの出身であれば、かならずしも与勝諸島のシマクチに通じるとは限らない。まさに手探りの合同調査となった。それでも毎晩の報告会では、語り手との出会いの感動があった。一応、徳之島の採訪の経験にもとずく収録で、約二百話、テープ二十数本に収めたのである。

翌年の昭和四十九年（一九七四）は、八月一日より十一日まで、沖縄本島の北部、国頭村・東村・大宜味村における三大学合同のフィールド調査に入る。この年は、あらかじめ遠藤氏は学内に口承文芸研究会を設け、昨年の経験をもとに、十分な体制を整えられていた。地元の各教育委員会も、積極的に協力されることとなる。立命館大学（院生）五名、大谷女子大学（学生）五名、そして沖縄国際大学（卒業生・学生）五十余名の大部隊となる。班を十に分ち、シマクチを主とする収録の方法について、あえてわたくしが指導・助言を試みる。その昔話の収集は、相当厖大なものとなった。その一部は後に、シマクチ・共通語対訳で、『国頭村の昔話』[16]として公刊される。

こうして口承説話のフィールド調査の体制はようやく整ったのである。昭和五十年の三大学合同調査は、八重山諸島（石垣・竹富・与那国）において、大勢の参加者で実施される。しかしてこれは、昭和五十一年に及び、順調に進められたと言える。

ところが、ここで問題が生じる。共同研究者の遠藤庄治氏が、この口承説話の収集活動を市民運動として展開されることを主張されたのである。時代は、木下順二氏などの提唱による民話運動が盛んなときであった。遠藤氏はこれに同調されて、沖縄民話の会を結成し、市民を動かして口承説話の収集活動を目ざしたいということであった。わたくしは、学問・研究は、政治運動とは一線を画すべきと考え、遠藤氏と袂を分ち、独自に奄美・沖縄の有志とはかって、奄美・沖縄民間文芸研究会を結成する。したがって昭和五十三年以降の昔話合同調査は、主に同研究会を主催として実施される。それは、それぞれの地元の研究会で合同において進められ、奄美諸島・沖縄本島（周辺諸島）、宮古諸島において、およそ、平成四年まで実施された。その間、同研究会は、学会を称し、その活動は今日に及んでいるのである。

わたくしどもの報告書

まずあげるべきは、南島昔話叢書〈全十巻〉（編集委員、山下欣一・福田晃・岩瀬博・遠藤庄治）の公刊である。それは〈刊

行にあたって〉にあげているように、「地域の方言による伝承」を重んじ、「方言による語りの再現を期するもの」である。したがって本叢書がとりあげる昔話本文は、「方言の語りを忠実に翻字」し、「共通語による対訳」を試みている。また本叢書のそれぞれは、「昔話の伝承世界」について、「相当に精細に解説をおこなう」ことを旨としている。まず第一期として、昭和五十八（一九八三）年より平成三年に及び、〈奄美諸島〉〈沖縄本島〉〈宮古島〉〈八重山諸島〉を収める。[17]

その他の刊行物としては、『琉球の伝承文化を歩く』全十二巻別巻一（三弥井書店）[18]がある。これは共通語で、伝承された伝説・昔話をとりあげている。既刊は四冊である。また立命館大学説話文学研究会独自の報告書が三冊ある。[19]共通語本文に、一部シマクチの本文対訳をあげる。関連の刊行物、[20]および関連学会誌[21]にも、随次、収集の昔話資料を収載している。

(二) 遠藤庄治氏を中心とするフィールド調査・報告書

沖縄国際大学・口承文芸研究会の活動

これは、右にあげた三大学合同調査のために結成されたものである。したがってその調査は、与勝諸島、沖縄・国頭地方、八重山諸島に及ぶ。ガリ版刷の『口承文芸研究会会報』（一号～七号）を公刊、それには随次、収集調査の資料を掲げている。またこれとは別に、ガリ版刷の報告書『沖縄昔話資料』第一～第八の八冊を公刊（昭和五十年～五十二年）する。

沖縄民話の会の活動

昭和五十一年（一九七六）四月に結成。事務局は、沖縄国際大学の遠藤庄治研究室に置かれる。当初は島尻勝太郎氏を会長とし、仲宗根政善氏などを顧問に迎え、広く沖縄文化の研究を切り開く意図がうかがえたが、やがて遠藤氏を中心とする民話運動としての沖縄民話の収集活動を展開する。しかも次々と各地に支部を設け、それと連動して各地の教育委員会を動かし、市民参加のフィールド調査に入る。遠藤氏を中心とした、その精力的な活動は、目を見張るものであった。年一回の大会開催、各年ごとの会誌を発行する。

その「民話の会」を中心とする民話収集の活動は、沖縄全域に及び、それぞれの教育委員会を発行元として、その地域の民話集が公刊された。「沖縄民話の会」およびこれに関連する機関からの公刊書は、おそらく五十余冊に及ぶものである。その活動は、いささか壮絶とも言えるものであるが、沖縄県下の市町村のそれぞれの文化財として「民話」を残した功績は、大であったと言わねばならない。

二　南島説話の大系

(一) 南島説話の範囲

さてここでわたくしは、南島説話の大系を提示するに当って、

先達の柳田国男氏が『口承文芸史考』[22]〈序〉において唱導された、神話伝承の一部を引き継ぐものが伝説であり、その分化したものが語り物と昔話であるというご高説は言上げしなければならない。その柳田氏によれば、神話の伝承は、ほとんど失われ、その信仰の残滓を留めたものが伝説であり、叙述の形式を受け継いだものが語り物、うそと知りつつその不思議な部分を保管したものが昔話として今に伝えて来ているという。しかし先にあげたように、南島においては、現代においても神女（ノロ）や巫女（ユタ）の司祭する祭儀において、神話が唱誦されている。それは、まさしく信仰のなかにおける聖なる神話の韻文伝承である。しかるに、わたくしどもの南島説話の収集のなかでは、散文伝承としてのハナシとしての神話を少なからず見出している。後にあげるようにこれは、松村武雄氏のあげられる俗性的神話[23]である。しかもわたくしどもの収集によれば、南島においては、かならずしも神話から伝説・昔話が分化したとする実態はうかがえない。それは、次にあげるように、神話・伝説・昔話、そして世間話が、それぞれの主題（思想）を有するものと判じられ、それがお互いに響き合いながら伝承されていると言うべきものと判じられるのである。

以下、その南島説話の範囲を各ジャンル別の伝承（思想）をもって示す。[24]「語り物」は、歌謡に属するものであり、史譚は、一般に伝説に含まれるものであるが、ここでは比較の上で、便宜的にとりあげている。

各ジャンルの伝承

伝承世界	ジャンル	伝承者	伝承の機会	伝承の意識	証拠	時制	固有性	叙述の形式	文体
聖←俗	神話	（神女）古老	（祭儀）祭儀の周縁	疑えない真実	ナシ	神の世	アリ	（アリ）ナシ	（韻文体）散文体
	伝説	古老	ムラ	信ずべきコト・モノ・出来事	アリ	古へ世近つ世	アリ	ナシ	散文体
	語り物	専門の語り手	ムラ	あったとされる物語	ナシ	アリ	アリ	アリ	韻文体
俗	昔話	語り上手	イエ	疑えない事実	ナシ	遠い昔	ナシ	アリ	散文体
	世間話	古老来訪者	ムラ	不確かな虚構	ナシ	現代	アリ	ナシ	散文体
	史譚	古老	ムラ	あったとされる史伝	ナシ	中つ世近つ世	アリ	ナシ	散文体

各ジャンルの思想

ジャンル	主題	観念	思想
神話	国土・人類・文化の起源	大自然の営みを畏怖する観念	大自然の始原を尊ぶ思想
伝説	聖なるコト・モノの由来	小自然・社会の営みを畏怖する観念	小自然の変異・人為の興亡を恐れる思想
語り物	異常な不幸	人間存在の可能性を否定する観念	人間の不幸を確認する思想
昔話	異常な幸福	人間存在の可能性を肯定する観念	人間の幸福を確認する思想
世間話	奇異・不思議な現実	人為・社会を畏怖・驚嘆する観念	人間・社会の現実を見極める思想
史譚	異常な事績	人為の異常を憧憬する観念	人為の過去を尊ぶ思想

（二）ジャンル別の分類私案

それぞれのジャンルについては、それぞれの研究の積み重ね

があるが、本稿においては紙面の余裕がないので、ほとんど省略して、それぞれの私案をあげる。

A「神話」伝承

松村武雄氏は、『神話学研究』第一巻[25]において、柳田国男氏の神話の概念は、韻文体による聖性的神話によるものであるとし、これに対する説話としての俗性的神話の存在をあげられる。つまり南島説話としてとりあげる神話は、散文体のハナシに属する俗性的神話ということになる。今、その私案をのみあげる。傍線部分は、後にあげる南島説話大系の具体的にとりあげる話型である。

〈南島「神話」分類私案[26]〉

(一)宇宙の起源―「天地分離」(アマンチューの足跡)「月と太陽」など。
(二)神々の葛藤―「ミルクとサーカ」「雨の神と竜宮の神」など。
(三)国土の起源―「アマンチューの国建島建」「流れる島」など。
(四)人類の起源―「兄妹始祖」「犬聟始祖」など。
(五)神の子・神の嫁―「蛇神の子」「天女の子」「太陽神の嫁」など。
(六)文化の起源―「火種子」「鶴の穂落し田」「五穀の始まり」(農耕の始まり)「舟の始まり」など。

B「伝説」伝承

およそ柳田国男氏は、「伝説はその成り立ちからしてハナシではなく、世に伝わっているコト(信仰事象)である」と説かれている[27]。したがって、『口承文芸史考』に次いで、昭和二十五年に公刊された『日本伝説名彙[28]』はそのコトの拠る「木」「石・岩」「水」「塚」「坂・峠・山」「祠堂」に分類してあげておられる。これに対して、野村純一氏を中心とするわたくしどもは、ハナシとしての伝説復元をめざし、昭和六十年(一九八五)から平成元年にかけて、『日本伝説大系[29]』(全十五巻、別巻二冊)を公刊している。したがって南島説話における「伝説」伝承も、それに準じて試案を提示する。

〈南島「伝説」分類私案〉

文化叙事伝説

〈その一〉「シマ・ムラの由来」を語るもの

「皆福部落の始まり」(宮古・城辺町)「長浜の始まり」(沖縄・読谷村)「通り池とユナタマ」(宮古・伊良部町)「ウプトゥ村の滅亡」(同上)など。

〈その二〉「一族・一門の由来」を語るもの

「察度王」(沖縄・宜野湾市ほか)「佐敷の小按司」(沖縄・佐敷町ほか)「王妃の屁」(沖縄・久高島)「ウスヌ主」(宮古・伊良部島)「鉄人の根原神殿」(八重山・竹富島)「美人の出ない村」(奄美・宇検村ほか)「世の主がなし」(奄美・沖永

良部島知名町）「仲屋マブナリ」（宮古・多良間島）など。

〈その三〉「モノ（文化）の由来」を語るもの

「赤犬子」（沖縄・読谷村）「龕の始まり」（沖縄・豊見城村）「ニンニクの始まり」（八重山・竹富島）「建築の始まり」（同上）など。

〈その四〉「コト（祭事）の由来」を語るもの

「ヤーマス御願由来」（宮古・下地町来間島）「真世加那志の由来」（八重山・石垣市川平）「赤マター神事由来」（八重山・小浜島ほか）など。

自然説明伝説

〈その一〉「動植物の由来」を説くもの

「蚊の始まり」（沖縄・那覇市）「ハブ住まず」（沖縄・渡嘉敷村）「野ばら」（八重山・石垣市）「西表島のツグ（藤蔓モドキ）」（八重山・西表島）など。

〈その二〉「石・岩の由来」を説くもの

「力石」（奄美・喜界島）「宮島御嶽のビッチュル石」（八重山・石垣市）「蹄跡石」（八重山・石垣市）「舟ン帆岩」（奄美・喜界島）「夫婦岩」（沖縄・読谷村）「石になった花嫁」（八重山・石垣市）など。

〈その三〉「橋・泉・水の由来」を説くもの

「真玉橋の人柱」（沖縄・那覇市）「一日橋由来」（沖縄・那覇市）「鳩が見つけた井戸」（宮古・伊良部島）「犬が見つけた井戸」（八重山・竹富島）「屋良漏池」（沖縄・嘉手納町）「無蔵水」（沖縄・伊平屋島）「鹿浦川の松淵」（奄美・伊仙町）など。

〈その四〉「坂・山・洞・田の由来」を説くもの

「オホン坂」（沖縄・南風原町）「恋ガリ山」（沖縄・大宜味村）「黄金山」（沖縄・大宜味村）「平家立」（奄美・喜界島）「クマヤ洞窟」（沖縄・伊平屋島）「後生が道の洞穴」（奄美・瀬戸内町）「鍋掻田」（八重山・波照間島）「浮き田」（宮古・伊良部島）「七掘田」（沖縄・読谷村）など。

〈その五〉「祠堂・墓の由来」を説くもの

「喜念権現」（奄美・伊仙町）「白銀堂」（沖縄・糸満市）「普天間権現」（沖縄・宜野湾市）「シンコーボーの墓」（奄美・喜界島）「玉御殿と木田大屋」（沖縄・南風原町）など。

C「昔話」伝承

柳田国男氏は、『日本伝説名彙』に先行して『日本昔話名彙』[30]（昭和二十三年）を公刊される。これはあえて欧米の分類案を退けて、その分類は、「完形昔話」から「派生昔話」に及んで示される。「神話」伝承に近いものが「完形」、それの零落したものが「派生」と判じられている。それは、『口承文芸史考』（序）の主張にしたがうものと言える。それに続く関敬吾氏の『日本昔話集成』[31]（昭和二十五～三十三年）、『日本昔話大成』[32]（昭和五十三年～五十五年）は、欧米の分類案に準じて「動物昔話」「本格昔話」「笑話」の三分類案である。欧米の伝承との比較を

念頭に置かれたものと言える。稲田浩二・小澤俊夫両氏の『日本昔話通観』[33]〈タイプ・インデックス〉（昭和五十二年～六十三年）も、およそこれに準じている。

あえて私案は、二分類案による。それはかならずしも柳田案に従うものではない。

〈南島「昔話」分類私案〉

〈その一〉本格昔話

〔誕生奇瑞譚〕「みやこはつ丸」「ねぶとの種子」「子育て幽霊」「寅千代丸」など。

〔異常婚姻譚〕「犬聟入」「天人女房」「蜷女房」「エイ女房」「絵姿女房」「難題婿」「牛の嫁入」など。

〔継子譚〕「灰息子」「継子と白鳥」「手なし娘」「継子の毒入り弁当」ほか。

〔兄弟譚〕「二人兄弟」「兄弟の仲直り」「三人兄弟」「七人兄弟」など。

〔致富譚〕「黄金小猫」「夢見小僧」「炭焼長者」「猿長者」「山神と童子」など。

〔厄難克服譚〕「片目の鬼の子」「三つの玉」「天から綱」「鬼の家の便所」「兄は鬼」など。

〔動物援助譚〕「物言う亀」「山犬の眉毛」「もの言う牛」「鱶に助けられた男」など。

〔機知譚〕「アシタビと松川童子」「姥捨山」「カタイラ・マーガの知恵」など。

〈その二〉非本格昔話

〔因縁話〕「生き返った娘」「首のない影」「焼紙の始まり」など。

〔妖怪譚〕「ケンムンのウワッバ」「キジムナーと友だち」「雨宿りとマジムン」「クスケー由来」など。

〔史譚〕「金志川父子の最期」「姉ミヤマコの知恵」「護佐丸と阿麻和利」「佐敷小按司のわざ競べ」「モーイ親方の嫁釣り」「渡嘉敷ペークの椰子どっくり」「名護親方と具志頭親方」など。

〔笑話〕「嗅び医者」「婆の鳥料理」「山原旅と団亀」「幽霊と塩売り」「喜如嘉蛙と国頭蛙」「蟹の褌」など。

〔鳥獣草木譚〕「雨蛙不孝」「子売りファ鳥」「比目魚由来」「アカラの鬼退治」「蛙と鳥の競争」「猿の生肝」など。

D「世間話」伝承

民間説話の研究史のなかで、世間話をそれに含むべきとする主張は、近年になっておこったものと言える。したがって、その分類案は、これまでの先学は、ほとんどふれることはない。ここでは、世間話研究に熱心にとり組んでこられた山田厳子氏の「富士吉田の世間話」[34]を参考としている。また昔話伝承が稀薄化した東京都における口承説話の収集に務めてこられた中島恵子氏の「中野の世間話」[35]が参考となる。次にその私案をあげるが、南島にお

ける世間話の伝承は、なかなか豊かであることが実感される。

〈南島「世間話」分類私案〉

〈その一〉神の霊異

〔告知〕「神女の話」（奄美・瀬戸内町）「ユタの話」（奄美・名瀬市）「神証の鳴る話」（沖縄・山原地方）「ノロ・神人の話」（沖縄・豊見城村）など。

〔邂逅〕「山の神問答」（奄美・瀬戸内町）「神になった娘」（同上）「ティンツィポぬ神（巨人神）」（奄美・大和村）「テンゴ神の話」（同上）「ニタンボージ（猪谷坊主）」（奄美大島）「ユワトゥシ神」（奄美・徳之島）「神様を見た男の話」（沖縄・山原地方）「権現の通路」（沖縄・宜野湾市）など。

〔懲罰〕「諸鈍の山の神の祟り」（奄美・瀬戸内町）「神の祟り」（奄美・徳之島）「不貞女を罰する久高の神々」（沖縄・久高島）など。

〈その二〉妖怪の奇異

〔化物〕

〈ガラッパ・ファンチンハンバー・カーボーザー〉「河童の恩返し」（奄美・喜界島）「ファチハンバー幽霊」（沖縄・大宜味村）「カーボーザーについて」（沖縄・久米島）など。

〈ケンモン・ブナガイ・アカカナジャー・ウンサガナシ・キジムナー・インガマヤラブ・マジムン・マジャー〉「ケンムンに迷わされた話」（奄美・笠利町）「ケンモンの屁」（奄美大島）「ケンムンと相撲」（奄美・大和村）「ブナガヤのいたずら」（沖縄・大宜味村）「ブナガヤの屁」（同上）「アカカナジャーの話」（沖縄・伊平屋島）「ウンサガナシ―の牛倒し」（沖縄・伊是名島）「キジムン霊を取る」（沖縄・宜野湾市）「キジムンと大和見物」（同上）「キジナーの胸押さえ」（沖縄・佐敷町）「キジムナー火」（同上）「インガマヤラブ」（宮古・伊良部島）「人間とマジムヌ」（同上）「マジャーの馬借り」（八重山・小浜島）など。

〈ミミキラウワー〉「耳無豚（ミミキラウワー）」（奄美大島）「豚幽霊（ウワームヌ）」（奄美・与論島）など。

〈アモレオナグ・チーアンマー〉「アモレオナグに取り憑かれた話」（奄美・笠利町）「アモレマタのアモレオナグ」（同上）「産女の話」（奄美・徳之島）「乳の親」（沖縄・山原地方）など。

〔変化（へんげ）〕

〈豚の化け〉「美女に化けた豚」（沖縄・山原地方）「豚の色男」（沖縄・宜野湾市）「豚の化物」（同上）など。

〈山羊の化け〉「山羊の化物」（沖縄・宜野湾市）など。

〈蛇の化け〉「マッティブの化け」（奄美・徳之島）「美男子になった斑蛇」（沖縄・山原地方）「蛇に見入られた娘」（沖縄・佐敷町）など。

〈猫の化け〉「化け猫とノロシャレ」（奄美・大和村）「名瀬の化け猫」（沖縄・佐敷町）など。

〈魚の化け〉「ビキンキル（怪魚）」（沖縄・大宜味村）など。
〈棺板・龕の化け〉「マジムンに恋した男」（沖縄・山原地方）「ガンが牛に化ける話」（沖縄・宜野湾市）など。

〔霊魂〕

〈冥界〉「死の前ぶれ」（奄美・笠利町）「後生へ行った話」（奄美・大和村）「魂を追い戻した話」（奄美・与論島）「あの世に行く魂を見た話」（同上）「奪われた妻の霊魂（マブイ）を取り戻した話」（沖縄・宜野湾市など。
〈生霊（イキマブイ）〉「生霊の話」（奄美・大和村）「イキロー」（奄美・与論島）「生霊に逢った男」（沖縄・山原地方）など。
〈死霊（シニマブイ）〉「妻の死霊」（奄美・大和村）「死霊に乗り移られた人」（沖縄・山原地方）など。
〈幽霊〉「モーレ（船幽霊）の話」（奄美・瀬戸内町）「幽霊の子守り」（奄美・徳之島）「ウグミ（妊婦幽霊）」（奄美・与論島）「ユーリー（背高幽霊）」（沖縄・山原地方）「ヤナムン（無縁幽霊）」（同上）など。
〈遺念火〉「安和の遺念火」（沖縄・山原地方）「東江の遺念火」（同上）「呉屋バンタの怪火」（沖縄・宜野湾市）「国吉坂の遺念火」（沖縄・糸満市）など。

〈その三〉人間の異常

〔運命〕「恋し背の君（瓦屋節由来）」（沖縄・宜野湾市）「位牌と結婚した話」（沖縄・大宜味村）「七回売られて親孝行をした人の話」（沖縄・那覇市）など。

〔奇行〕「山の八茶坊」（奄美・大和村）「弓の名手イナディオンノー」（奄美・徳之島）「大力の仲尾大腹」（沖縄・宜野湾市）「臆病な武士」（沖縄・大宜味村）「芸〈三味線〉は身を助ける」（沖縄・那覇市）「大力のマギー」（沖縄・糸満市）「武芸者の文徳マサー」（同上）など。

三　「南島説話大成」の具体的試案

具体的試案における基本方針

先にあげたように、わたくしどもが南島における口承説話の収集調査にとり組んだ頃は、南島においては、日常的にシマクチが用いられ、わたくしどものヤマトグチ（共通語）は、年輩の年寄には、容易に通じないものであった。しかしそれから十年、つまり沖縄が本土に復帰して以来、南島における共通語の普及は目ざましいものとなった。「方言札」を吊されて笑い者となったという、年寄の少年時代の苦い経験は問題にされなくなったと言える。わたくしどものシマクチを中心とする口頭説話のフィールド調査も、共通語のそれによることに変貌して、今日に至っている。

およそ「南島説話大成」は、『南島歌謡大成』に準じて編集を試みるものであるが、今日、わたくしどもにある伝承資料は、シマクチ中心の報告書よりも、共通語のそれが、むしろ多く、シマクチのみによる『歌謡大成』に準じての編集は、不可能と言える状況である。また、『歌謡大成』は、奄美・沖縄本島・宮古・八

重山の四つの方言圏によって編集されている。しかしわたくしどもにある伝承資料は、奄美・沖縄本島が多く、宮古・八重山はそれが稀薄で、方言圏別による「説話大成」の編集は困難である。

右のような状況のなかで、「南島説話大成」試案は、シマクチを主としながら共通語の資料を添えることとする。また四つの方言圏による収載はあきらめ、南島全体を一括してあげることとして、試案を提示することとなった。

ジャンル別の具体的試案

まず『大成』試案は、「神話」伝承・「伝説」伝承・「昔話」伝承・「世間話」伝承のジャンル別にあげる。その配列は北の奄美から南の八重山に及ぶ順序による。例話はまずシマクチ（対訳）の本文をあげ、続いて共通語本文を添える。ときには共通語本文の類話を出典名だけで示すことがある。しかして本稿は、『大成』全体をあげるのではなく、その試案として代表例話をあげるにとどまる。そのジャンルごとの代表例話は、サブタイプがあれば、それによる。

A「神話」伝承

アマンチュウの足跡（「天地分離」）

アマンチュウの国建・島建

「国土の起源」「人類の起源」「国土の起源・人類の起源」「国土の起源・人類の起源・農耕の起源」「国土の起源・人類の起源・国土の起源・人類の起源・農耕の起源」

B「伝説」伝承

村（しま）の始まり（島建伝説）

村（しま）の終わり（元島伝説）

鉄人の最後（英雄伝説）

美人の出ない村（美女伝説）

C「昔話」伝承

天人女房

「天女昇天」(一)始祖誕生型、(二)天女昇天型、(三)銘苅子口説型、(四)銘苅子組踊型）

「天女再会・別離」

「星女房」(一)天女昇天型、(二)天女地上再会型、(三)押しかけ女房型）

D「世間話」伝承

妖怪と人間

「ケンモン来訪」

「キジムナーと屁」

「キジムナーと蛸」

「キジムナーの仕返し」

（なお本誌には、右にあげたジャンル別のA「神話」、B「伝説」、C「昔話」、D「世間話」の具体的試案をあげる紙面は用意されていない。それは九月公刊予定の拙著『「日本」と「琉球」―南島説話の展望―』〈法蔵館〉収載の資料編「南島説話大成の具体的試案」をご覧いただきたい）

以上、本稿が省略したA「神話」伝承、B「伝説」伝承、C「昔話」伝承、D「世間話」伝承の代表例話によって、南島説話の全貌の一端を見聞してみる。しかし今、そのジャンルごとの伝承世界をコメントする余裕はない。が、この試案からうかがえることは、それぞれのジャンルの伝承は、それぞれに独自の世界を有することは勿論、そのジャンルに属する伝承例話は、しばしば隣接するジャンルに近づいていることである。しかしそれは、「神話」伝承が源にあって、それが他のジャンルに分化するという伝承の実態を示すものではない。その南島説話の伝承大系は、ダイナミックに連動し合って、南島における口承文化の世界を築いているのである。

おわりに―「南島説話大成」の可能性―

わが国における伝説・昔話の意義を明らかにするために、われわれの先学は、その収集につとめ、その全貌を明らかにするための、その大系化をはかり、またインデックスの公刊が果されてきた。

しかしこのような大系化の作業は、一方では、それぞれの地域において伝承された口承説話の本文は集約化され、抽象化されて、伝承そのものの実態を隠してしまうようにも思われる。たとえば、それぞれの地域における伝承は、それぞれの地域のコトバ（方言）によるものである。そしてそのコトバは、まさしくその地域の心意（真意）にもとづく表現である。しかしこれまでのインデックスにおいては、その地域のコトバ（方言）は、ほとんど消されて紹介されている。わたくしどもは、昭和四十年代以降、テープ・レコーダーの発達もあって、その地域の語り手のコトバをそのままに収録し、それによる報告書を作成して、世に送り出してきた。しかしこれが、諸氏のインデックスに採用されるとき、多くはその地域のコトバは、共通語の大略に変じて引用される。それでは、その伝承の真意は消えてしまっていることが危惧されるのであった。

特に南島においては、独自のシマクチが長く流布している。それならば、それに拠った「大成」が作成されてしかるべきではないか。そのとき思い出されるのは、外間守善氏を中心とする『南島歌謡大成』であった。しかし南島における伝承資料の蓄積は、これに準じて作成することが、およそ不可能であることをすでに説いている。したがって、今わたくしは、その試案を示して、「南島説話大成」の可能性を提示するのである。

ほとんど毎年のように南島を訪れること五十年。わたくしに残された人生は、ようやく尽きる。いつの日か『南島説話大成』の公刊が実現されることをシマクチに通じる若い学究に期する次第である。

注

（1）柳田国男氏は、大正十年（一九二一）に、沖縄にわたる。そ

の直接の動機は、伊波普猷氏から『古琉球』の寄贈を受けてのことである。同年一月、まず沖縄県立図書館に伊波氏の許を訪ね、沖縄本島の各地をめぐり、その下旬には、宮古を経由して、石垣島に上陸。岩崎卓爾氏・喜舎場永珣氏らに迎えられ、およそ一週間、石垣島の拝所を視察。同二月上旬には、沖縄本島に戻り、奄美を経由して、二月中旬に帰郷する。その南島訪問の体験は、『海南小記』（大正十四年、大岡山書店）として公刊され、晩年には『海上の道』（昭和三十六年、筑摩書房）より上梓される。沖縄帰郷後は、南島談話会を開き、主に在京の南島出身者の研究を助言・指導する。

折口信夫氏は、柳田国男氏の南島体験の話を聞き、大きく心を動かされ、大正十年の夏に、第一回の沖縄採訪を試みる。それは、同年七月から八月に及び、主に沖縄周辺を巡っている。およそ地元の研究者の案内によるもので、「沖縄採集手帖」（『折口信夫全集』第十六巻所収、昭和三十一年、中央公論社）によって知られる。その第二回の渡島は、大正十二年七月から八月に及ぶもので、その前半は沖縄本島、後半は石垣島の採訪調査であった。それは前回と同じく、在地の研究者・郷土史家の案内にもとづくもので、この採訪調査の一部は、「沖縄採訪記」（『全集』第十六巻所収）によって知ることができる。この二度にわたる採訪は、「琉球の宗教」（大正十三年）、「沖縄に存する我が古代信仰の残滓」などとして公表される。（『全集』第十六巻所収）。しかもこれらと前後して、折口氏の畢生の書ともいうべき『古代研究』三巻（昭和四年・同五年・六年）（『全集』第一巻～第三巻。昭和二十九年、三十年、中央公論社）が公刊される。直接的・間接的に沖縄採訪に大きく影響された著述と言える。

沖縄学の祖とうたわれる伊波普猷氏は、明治九年（一八七六）、那覇の士族の嫡男として誕生。中学四年生の折、県立中学校を退学して上京。受験の失敗を繰り返しながら、明治三十三年に、二十五歳で第三高等学校第一部文科に入学する。その三高を卒業して東京に出た伊波は、中学時代の恩師・田島利三郎と再会、居を共にして、田島より『おもろさうし』の解読の手ほどきを受ける。明治三十九年、伊波は三十一歳で、東京帝国大学言語学科を卒業、学問研究の野望をもって帰郷、まずは沖縄の古文献の収集と筆写に費やすが、次第に沖縄が背負った総体的な重みを痛感し、沖縄史講座の啓蒙的実践活動を十余年続ける。明治四十四年十二月、沖縄公論社より『古琉球』を公刊。この書は、本土の研究者に、琉球諸島のもつ学問的文化的意義を認識させる契機となる。大正十年の一月、この書に啓発された柳田国男氏が、伊波氏に会うため、沖縄渡島に及んだことは先にふれた。伊波普猷は、その柳田より『おもろさうし』の重要性を吹き込まれ、折口信夫氏との出会いもあって、先の沖縄啓蒙の運動から身を引き、『おもろさうし』の校訂と解釈を精力的に進める。大正十三年、その『おもろさうし』の校訂は完成、その年の十二月に県立図書館長を辞任して、大正十四年の二月上京、東京において執筆活動に入る。その業績については、いちいちはふれない。上京後、

柳田との親しい交流は、学説上の意見の違いから、やがて疎遠となる。伊波のそれは「沖縄への南漸説」であったが、柳田は南方からの「海上の道」に沿った北進説であった。昭和二十二年八月十三日、戦後の混乱期のなか、「故郷」を想うて「島惑ひ」してこの世を去る。その経緯は、外間守善氏の『沖縄学への道』（平成十四年、岩波書店）が詳しい。

（2）右掲注（1）引用の外間守善氏『沖縄学への道』による。

（3）（4）角川書店発行。

（5）西郷信綱氏共著、岩波書店発行。

（6）一九七二（昭和四十七）三一書房。

（7）一九七一（昭和四十六）三一書房。

（8）角川書店。

（9）一九八四（昭和五十九）岩波書店。

（10）一九二四（大正十三）年四月、雑誌『日光』第一巻第一号「国文学の発生（第一編）—呪言と叙事詩—」（『折口信夫全集』第一巻　一九五五　中央公論社）

（11）一九九五（平成七）　角川書店。

（12）一九七七（昭和五十二）弘文堂。

（13）一九七九（昭和五十四）法政大学出版局。

（14）一九七八（昭和五十三）同朋舎出版。

（15）一九八六（昭和六十一）笠利町教育委員会発行。

（16）遠藤庄治・丸山顕徳・安里和子三氏共編。一九八六（昭和六十一）同朋舎出版。

（17）〔南島昔話叢書〕の書目〔出版元・京都の同朋舎出版〕

		〈書名〉	〈編者〉	〈刊行年〉
1	〈奄美大島〉	瀬戸内町の昔話	登山修	一九八三（昭和五十八）
2	〈奄美大島〉	大和村の昔話	山下欣一・登山修・児玉永伯・重信三千子・重信和子	一九八六（昭和六十一）
3	〈奄美諸島〉	徳之島の昔話	福田晃・岩瀬博・松山光秀・徳富重成	一九七八（昭和五十三）
4	〈沖縄本島〉	国頭村の昔話	遠藤庄治・丸山顕徳・安里和子	一九八六（昭和六十一）
5	〈沖縄本島〉	島尻の昔話（上）	狩俣恵一・伊芸弘子・松本孝三・真下厚・福田晃	（近刊予定）
6	〈沖縄本島〉	島尻の昔話（下）	狩俣恵一・伊芸弘子・松本孝三・真下厚・福田晃	（近刊予定）
7	〈宮古島〉	城辺町の昔話（上）	福田晃・佐渡山安公・下地利幸・岡本克江・山本清	一九九一（平成三）
8	〈宮古島〉	城辺町の昔話（下）	福田晃・佐渡山安公・下地利幸・岡本克江・山本清	一九九一（平成三）
9	〈八重山諸島〉	竹富島・小浜島の昔話	福田晃・真下厚・狩俣恵一・仲盛長秀・花城正美	一九八四（昭和五十九）
10	〈八重山諸島〉	与那国島の昔話	岩瀬博・高里康子・松浪久子・長浜洋子	一九八三（昭和五十八）

※別巻〈沖縄・首里の昔話—小橋川共寛翁のチティバナシ—〉伊芸弘子編者　一九九二（平成四）　三弥井書店

（18）①福田晃・山里純一・村上美登志編『八重山・石垣島の伝説・昔話（一）—大浜・宮良・白保—』二〇〇〇（平成十二）

②狩俣恵一・丸山顕徳編『西表島・黒島・波照間島の伝説・昔話』二〇〇三（平成十五）

③岩瀬博・高橋一郎・松浪久子編『喜界島の伝説・昔話』二〇〇六（平成十八）

④福田晃・山里純一・藤井佐美・石垣繁・石垣博孝編『八重山・石垣島の伝説・昔話（二）—登野城・大川・石垣・新

川―』二〇一七（平成二十九）

(19) ①『奄美・笠利町昔話集』〔笠利町文化財報告第九号〕一九八六（昭和六十一）笠利町教育委員会
②『沖縄・佐敷町の昔話』〔佐敷町文化財Ⅳ〕一九八九（平成元）佐敷町教育委員会
③『沖縄・糸満市の昔話』一九九六（平成八）糸満市教育委員会

(20) a. 福田晃編『総合研究　沖縄地方の民間文芸』〔文部省科研費〕一九七九（昭和五十四）三弥井書店
b. 昔話研究懇話会編『昔話―研究と資料―第七号　南島の昔話』一九七九（昭和五十四）三弥井書店
c. 福田晃・岩瀬博・遠藤庄治編『日本の昔話30沖縄の昔話』一九八〇（昭和五十五）日本放送出版協会

(21) a. 奄美・沖縄民間文芸研究会編『奄美沖縄　民間文芸研究』創刊号（一九七八（昭和五十三））～第二十三号（二〇〇〇（平成十二））
b. 奄美・沖縄民間文芸学会編『奄美沖縄　民間文芸学』創刊号（二〇〇一（平成十三））～第十五号（二〇一七（平成二十九））

(22) 一九四七（昭和二十二）中央公論社。

(23) 『神話学研究』第一巻〈序説篇〉第一章第一節「神話主体不明説とその批判」一九五四（昭和二十九）培風館。

(24) 福田晃編『民間説話―日本の伝承世界―』「民間説話」一九八九（平成元）世界思想社、同『沖縄の伝承遺産を拓く―口承神話の展開―』「神話・伝説・昔話の間」、補説二〇一三（平成二十）三弥井書店。

(25) 注（23）同書。

(26) 福田晃・岩瀬博共編『民話の原風景―南島の伝承世界―』「南島説話の伝承世界」一九九六（平成八）世界思想社に準ずる。なお、以下の「伝説」「昔話」「世間話」分類私案もこれに拠っている。

(27) 『昔話研究』第三号「伝説とは何か」一九三五（昭和十）三元社。

(28) 日本放送出版協会。

(29) 編集委員、荒木博之・野村純一・福田晃・宮田登・渡辺昭五一九八二（昭和五十七）～一九九〇（平成二）

(30) 日本放送出版協会。

(31)(32) 角川書店。

(33) 同朋舎出版。

(34) 山田厳子氏編『富士吉田の昔話・伝説・世間話』一九八五（昭和六十）富士吉田市郷土館。

(35) 中島恵子氏編『中野の昔話・伝説・世間話』一九八七（昭和六十二）中野区教育委員会。

（ふくだ・あきら／立命館大学名誉教授）